

社会教育に関する調査研究
社会教育の視点をもった防災教育 実践事例集

防災を通じた 人づくり・地域づくり



岡山県生涯学習センター
令和3年3月

はじめに

近年、毎年のように日本各地で大規模な地震や風水害等の自然災害が発生しており、平成30年7月に発生した西日本豪雨災害は岡山においても甚大な被害をもたらしました。災害の被害を防いだり、低減させたりするには対策が重要です。そのためには、防災施設整備や建造物の耐震化等のハード面だけでなく、学びを通して地域住民の防災意識を高めるとともに、人と人のつながりをつくり、行動につなげていくといったソフト面の取組も必要不可欠です。このソフト面の取組こそ、これからの社会教育に求められる重要な役割であり、その推進をしていくことが必要だと考えております。

岡山県生涯学習センターは、県の生涯学習推進の拠点施設として、県民の方々への様々な学習機会や学習情報の提供、指導者養成などを行っています。令和元年度に開催された社会教育実践専門講座では「防災」に焦点を当て、「社会教育の視点を取り入れた防災教育」をテーマとし、その指導者養成を図るための講座を開催しました。さらに、その講座の受講者のその後の取組について取材を行ったところ、素晴らしい実践を見ることができました。

そこで、その実践について詳細をまとめ、広く情報発信し、市町村の生涯学習・社会教育課、防災・減災に携わる関係各課をはじめ、社会教育施設やNPO、ボランティア団体、自主防災組織等の防災・減災に関する取組を支援することをねらいとして本事例集を作成しました。

本事例集が、各地域の防災力の向上につながれば幸いです。

終わりにになりましたが、本調査研究の作成に当たり、御指導をいただきました特定非営利活動法人ふくおかNPOセンター代表 古賀桃子さんをはじめ、取材を快く引き受けてくださった（公財）みずしま財団 藤原園子さん、岡山市立興除公民館 藤井裕子さん、NPO法人岡山市子どもセンター 美咲美佐子さん、片山由美子さん、岡山県立倉敷古城池高等学校 山口裕子先生、生物・園芸部の部員の皆さん、本事例集の作成に当たって御協力いただきました関係者の皆様に厚くお礼申し上げます。

令和3年3月

岡山県生涯学習センター 所長 村木 生久

目 次

社会教育の視点をもった防災教育

「防災を通した人づくり・地域づくり」に向けて	1
防災学習プログラム作成のポイント	5

実践事例

○実践事例①「高校生と一緒に考えよう 私たちのまちの防災」

(公財)みずしま財団 藤原 園子さん	6
・防災学習プログラム作成の経緯	7
・実施に向けて	8
・防災学習プログラム	9
・活動の様子	10
・活動を終えて	16
・考察	16

○実践事例②「防災語ろう会」

岡山市立興除公民館 藤井 裕子さん	18
・防災学習プログラム作成の経緯	19
・実施に向けて	20
・防災学習プログラム	21
・活動の様子	22
・活動を終えて	25
・考察	26

○実践事例③「おやこde防災 ～私に合った防災手段を見つけよう!～」

NPO法人 岡山市子どもセンター	28
・防災学習プログラム作成の経緯	29
・実施に向けて	30
・防災学習プログラム	31
・活動の様子	32
・活動を終えて	35
・考察	36

○実践事例④「さまざまな人を包摂する楽しい防災の試み

～Happy ぼうさいプロジェクト～	
特定非営利活動法人ふくおかNPOセンター	
代表 古賀 桃子さん	38
・防災学習プログラム作成の経緯	39
・実施に向けて	40
・防災学習プログラム	41
・活動を終えて	45

考察

(特定非営利活動法人ふくおかNPOセンター 代表 古賀 桃子さん)	46
-----------------------------------	----

まとめ	48
-----	----

社会教育の視点をもった防災教育

「防災を通じた人づくり・地域づくり」に向けて

【地域で防災教育に取り組む背景】

我が国では、ほぼ毎年のように地震や風水害等の自然災害が発生している。そして、発生した災害が大きければ大きいほど、公的機関は本来の機能を発揮することが困難になり、同時に救助等の対応に追われることとなる。そのような状況下だと地域住民は自らの命と安全を守ることを迫られ、早急に近隣で互いに助け合うことを余儀なくされる状況に陥ってしまう。平成23年3月11日に発生した東日本大震災では、大規模広域災害が発生した時における「公助」の限界が明らかになるとともに、「自助」「共助」の重要性が再認識され、地域で取り組む防災教育が注目されることとなった。

【災害に関する自助・共助・公助】

自助・・・自らの命を自らが守ること。普段から災害に備えて物資の備蓄や、自身で状況を判断し、適切な避難行動を行うこと。

共助・・・近隣が互いに助け合うこと。高齢者や障がい者、乳幼児などの要配慮者の避難誘導、生き埋めになった人の救助活動など。

公助・・・行政機関が実施する公的な支援のこと。災害発生に備えた啓発・準備・整備や、災害が発生した時に行う情報提供や避難所運営などの災害対応など。

岡山県においても、平成30年7月に発生した西日本豪雨災害では多くの被害が発生し、近いうちに発生が予測されている南海トラフ地震への不安と共に、人々の防災・減災への関心が高まっている。

さらに、令和2年7月豪雨において被害を受けた熊本県では、新型コロナウイルス感染拡大の影響により県外からのボランティアの受入が制限され、「共助」よりも世帯ごとの「自助」の備えの必要性が明確になった。

【地域のつながりの重要性】

大規模災害から命を守るためには、河川堤防や砂防堰堤といった防災インフラを強化するなどのハード面が強調されがちだが、それだけで被害を最小限に抑えることは不可能である。阪神淡路大震災で生き埋めになった多くの人を救ったのは近隣の住民である。また、東日本大震災では、地域への愛着やつながりの強い地域が避難活動や避難所運営などを比較的スムーズに行うことができたと言われている。想定を越える大規模災害が発生した際、その被害を最小限に抑えるためには、自助や共助がバランスよく機能することが求められ、そのためには、一人一人が必要な知識を習得して事前に備えるとともに、いざという時に助け合うことができる地域づくりが必要である。

しかしながら、地域の現状はどうだろうか。時代の流れとともに社会構造や生活スタイル、人々の価値観は変化し、地域のつながりの希薄化、少子高齢化、地域の自治会の衰退や消防団の加入率の低下等の様々な課題があり、いざという時にスムーズに近隣での助け合いを可能にするほど地域のつながりが強いとは言い難い。また、自主防災組織が立ち上がっているものの、防災訓練等の地域防災の取組に参加する住民層が限られている傾向もある。ただ、毎年のように日本各地で大規模災害が報道され、平成30年7月には西日本豪雨災害が発生し、自助・共助の重要性が多くの人々に認識され、人々の防災・減災についての関心が高まっている現状は、地域住民を巻き込みやすい環境が整いつつあると言える。まさに今は、社会教育において地域の実態や課題に応じた防災教育に取り組むことができる好機でもある。

例えば、公民館は、地域住民のために社会教育を推進する拠点施設として中心的な役割を果たし、仲間同士が「つどう」「まなぶ」「むすぶ」ことを促し、人づくり・地域づくりに貢献している。防災教育を通して、人づくり・地域づくりに取り組むことで、地域の抱える課題の解決につながり、結果的に地域の課題解決に向けた取組が、災害時に対応する地域の力になる。

地域において防災教育を実施する主体としては、公民館に限らず、地域の社会教育施設、行政、社会教育関係団体、学校、民間団体、NPO等が考えられる。

【防災を通した人づくり】

「防災を通した人づくり」とは、防災学習プログラムを通して災害が発生した時に自助及び共助の両面で効果的な対応ができる「いざという時に動ける人」を育成するとともに、防災教育の担い手が、防災学習プログラムの実践を通して地域の課題解決や活性化を図るキーパーソンになることと考える。

「いざという時に動ける人」を育成するとは、地域において防災教育を実施することにより、対象となる人々が、防災・減災を自分事として捉えるようになり、その知識や技能を磨き、地域の特徴を理解した上で、大規模災害発生時に、自らと家族の命と安全を守るために適切な避難（自助）を行うとともに、近隣の高齢者や障がい者、乳幼児などの要配慮者の避難を誘導したり、困っている人を助けたりすること（共助）ができる人を育成することである。そのためには、防災・減災に限らず地域の資源や課題を熟知し、各種団体や個人とネットワークを築き、地域の課題解決や防災・減災に取り組む防災教育の担い手が必要となる。本書は、様々な主体において地域に応じた防災教育に取り組んでいる人、あるいは取り組もうとしている人の一助となることを目的として、実践された4事例を掲載している。

【防災を通した地域づくり】

「防災を通した地域づくり」とは、地域の住民を「いざという時に動ける人」に育成するだけでなく、防災学習プログラムの実施を通して参加者同士がつながったり、防災学習プログラムの実施に向けて防災・減災に限らず様々な分野の関係者が連携・協働することにより、新たなネットワークが生まれたりすることを考える。

地域で「自助」「共助」の力を高めるために防災教育に取り組む場合、福祉や教育と連携・協働することが効果的である。例えば、高齢者の福祉サービスや認知症の高齢者の見守り活動を担当する市町村の担当課と連携したり、地域の中学生や高校生が「地域社会の一員」として可能な範囲で、地域住民の避難活動を支援したりするなどの取組が考えられる。大学の専門家や消防士、社会福祉士、NPO等の各種団体や個人をコーディネートして関係をつくるのが災害に強い地域づくりの基盤となる。それぞれの役割や強みを理解し、目

的を共有した上で連携・協働の関係をつくることでより効果的な防災の取組が可能となる。

また、大規模災害発生直後は、各地で避難や救助活動等の素早い対応が求められ、その対応を行うのは地域住民である。地域で生活する住民同士が「顔の見える関係」でつながっているからこそ、手を取り合って助け合うことができる。よって、防災学習プログラムの対象として、高齢者や小中学生や高校生といった地域の子ども、子育て世代の保護者、地域に在住する外国人など多様な人々を巻き込んで実施することが効果的である。防災教育を通して関係を育むだけでなく、自分とは違う立場の人と関わることで、相互理解につながることも期待できる。また、直接防災・減災に関係のない学習や交流の機会を通じて多様な人々がつながることも、結果的に、いざという時に力を発揮する地域の絆を深め、災害に強い地域づくりの取組となる。防災教育の担い手は、地域の課題やニーズ、特徴や強みを把握し、対象となる人々に周知方法を工夫して参加者を確保することにより、対象となる人々が興味をもって参加するような防災学習の機会を設定することが大切である。

〔参考〕

「地域における防災教育の実践に関する手引き」

平成27年3月 内閣府（防災担当）防災教育チャレンジプラン実行委員会

防災学習プログラム作成のポイント

防災学習プログラム作成の際は、目的、対象者、場所、時期と回数、連携機関、活動内容、目標、事業費、広報、評価について具体的に考えることが必要である。さらに、その実践においては、次の4つを念頭において取り組むとよい。

① 地域の特性や問題点、過去の被災経験を知ること

地域の特性や起こる可能性のある災害とそのリスクを把握したり、過去に起こった災害の様子を調べたりすることにより、災害発生時の状況を想定した上で、対象者のニーズに応じた取組を考えることが重要である。

② できることから少しずつ継続して取り組むこと

大規模災害が発生した最悪の場合を想定しつつ、関係する各種団体や個人と連携や協力を図り、取組に必要な時間や資金等を確認した上で、できることから少しずつ始めることが重要である。行動することと思わぬ成果が得られたり、新たな課題が見つかったりすることもあるので、小さな活動でも継続して取り組むことが重要である。また、取組を終えた後には成果や課題を振り返り、次の取組に生かしていくことが大切である。

③ 様々な立場の関係者と積極的に交流すること

様々な関係者と協力・連携することにより、新たなネットワークができたり、自分たちではできないような取組を実践することが可能になったりする。取組を行う体制を整えることが重要である。

④ 明るく、楽しく、気軽に実行すること

防災学習をお祭りなどの地域のイベントや日常的な活動と関連づけて、楽しく防災に触れる機会を設けることが大切である。また、気付いたことを共有したり、学んだことを話し合ったりすることで、参加者の学びは充実しやすくなる。多様な人たちがたくさん参加し、参加者同士がつながることが地域の絆を深め、災害に強い地域づくりの基盤となる。

高校生と一緒に考えよう 私たちのまちの防災

(公財) みずしま財団 藤原 園子さん



目的：高校生と地域の方が一緒に学び合う講座を開催し、参加者の防災・減災に関する意識と意欲を高め、災害に強い人を育成する。

主催：環境学習を通じた人材育成・まちづくりを考える協議会

共催：福田中学校区人権学習推進委員会

対象：高校生、地域の方 等

○防災学習プログラム作成の経緯（立案者の意図、思い、地域や対象者に関する課題等）

事例の実践者は、みずしま財団の藤原 園子さん。みずしま財団は正式名称を「公益財団法人水島地域環境再生財団」といい、平成12年3月に、倉敷公害訴訟の和解金の一部を基金に水島地域の環境再生・まちづくりの拠点として設立された。よりよい生活環境を創造する活動を展開していくために、調査活動をはじめ、学びの場づくり、人とのつながりづくり、そして公害の経験の継承と公害患者支援などを行っている。

平成30年7月に発生した西日本豪雨災害で倉敷市真備地区が被災し、水島にも避難所ができた。その時、みずしま財団は避難所の運営や支援に協力したが、今、振り返ると、どう動いたらいいのか分からなかったことや、「十分なことができていたのだろうか」と反省することもあったと藤原さんは言う。

水島の人々は平成30年7月の西日本豪雨災害では被災者を受け入れる側となったが、これから先、もしかすると自分たちが被災者になる可能性もある。いざとなった時に、どう動くことができるのか。藤原さんは防災教育の必要性を感じ、みずしま財団が行っている環境学習に、防災の視点を取り入れることはできないだろうかと考えた。藤原さんは、以前は環境学習と防災学習は別で、防災教育は自治体や町内会等が取り組むものだと思っていた。しかし、ESD 活動支援センター、文部科学省、環境省主催「ESD 推進ネットワーク全国フォーラム 2018」（分科会「自然災害に備えた人づくり」）や、岡山県生涯学習センター主催「令和元年度 社会教育実践専門講座『社会教育の視点をもった防災学習プログラムづくり』」に参加し、防災について学ぶうちに、防災教育は様々な主体がそれぞれの特徴を生かして取り組むことができると考えを改めるようになった。

そこで、藤原さんが注目したのは高校生だ。どの地域でも若い世代は地域の避難訓練に参加する人が少なく課題である。その一方で、水島では地域学習に取り組み、熱心に活動する高校生がいる。このようなエネルギーを持っている高校生が防災に関して興味を持ち、災害発生時に自分たちができることは何かを考えながら行動できるようになってほしい。藤原さんは、高校生が防災について学んだことを地域の中で発表し、地域の方と一緒に学びを深める場面を作ることを思いついた。

高校生自身が自分のまちの自然条件や地形を知り、その上で災害リスクを考える方法として藤原さんが考えたのは地図や立体であるジオラマを制作することだ。高校生にとってジオラマを制作することは、もし、災害が自分たちの住んでいるところで起こったらどうなるかを考えるきっかけになると考えたからだ。

○実施に向けて〔打合せ（関係機関との連携の様子）、参加者への広報、準備等〕

藤原さんは、岡山県立倉敷古城池高等学校に計画を伝え、「内容に興味を持っていただき、協働で取り組むことができないでしょうか」と話を持ちかけた。倉敷古城池高校は、以前から地域学習に意欲的に取り組んでいる地元の高校だ。倉敷古城池高校の生物・園芸部顧問の山口 裕子先生は藤原さんと相談し、部活動でジオラマ制作に取り組むことを考えた。藤原さんと山口先生は、高校生が主体的に取り組む姿勢を大切にしたいと考え、活動の趣旨や内容について十分に打合せをした。また、ジオラマ制作に関しては、以前からお世話になっていた岡山大学地域総合研究センターの前田 芳男先生にアドバイザーをお願いした。前田先生自身が平成28年熊本地震の際に被災した経験をお持ちのため防災の視点からの助言が期待できた。実際に高校生は自分たちで試行錯誤を重ね、試作品を制作したり、現地を歩いて観察したりするなど、ジオラマの制作に自主的に取り組んだ。

しかし、実際の地形を忠実に再現することは高校生にとって予想以上に難しかったため、山口先生と藤原さんは、前田先生から高校生が直接、助言をいただく機会を設定した。高校生は前田先生から、再現する地形の中にある農業用のため池は過去に決壊したことがあるのか、広さと深さから決壊するとどれだけの水の量が流れ出すのかという危険性を把握する必要があること、ジオラマは地図の縮尺をもとにした範囲だけでなく、等高線をもとに高さについても正確に再現することが必要であること、ジオラマを作成することにより地形を深く理解することができることを学ぶことができた。

前田先生から高校生が直接、助言を受けるにあたっては、事前に前田先生と山口先生、倉敷市福田公民館の今田 尚登館長と藤原さんで大人の作戦会議（打合せ）を行い、取組の中での高校生の学びを確認し、今後の展開として高校生のジオラマ制作の取組を中心とした地域の方の防災学習について話し合っている。

講座の開催にあたっては今田館長にお願いし、倉敷市福田公民館を会場とした。倉敷古城池高校は地域との協働に意欲的で公民館との関係もよいそうだ。地域の高校生を中心に、町内会長や民生委員など地域の中心となっている人たちを講座の対象に、地域の防災力向上を目指そうと考えた。



（公財）みずしま財団
藤原 園子さん

防災学習プログラム

高校生と一緒に考えよう 私たちのまちの防災

対象：高校生、地域の方

現状と課題

○地域の避難訓練に参加する高校生は少ない。高校生が自分たちの住んでいる地域について知り、防災・減災について興味を持ち、主体的に取り組むような風土を醸成したい。

ね ら い

○実際に避難所支援に携わった方の話を聞き、防災・減災に関する経験や思いを共有し、参加者の防災・減災に関する意識を高める。

○高校生と地域の方が一緒に学び合うことで、参加者の防災・減災に関する意識と意欲を高め、災害に強い人を育成する。

【目指す状態】 ○参加者が災害発生時の避難所生活・避難所運営のイメージを持つことができる。

○参加者が災害に備えた自分の具体的な行動を考えることができる。

連 携 先

岡山県立倉敷古城池高校、倉敷市福田公民館

(共催) 福田中学校区人権学習推進委員会

(アドバイザー) 岡山大学地域総合研究センター 教授 前田 芳男先生

実施のポイント（広報、経費など）

広報：チラシ配布、みずしま財団のホームページ、福田公民館の案内

経費：講師謝金、印刷費、ジオラマ材料費 他

(公財) 福武教育文化振興財団の助成を受けて実施

活動に向けて（工夫点、注意点など）

○参加者の学びを深められるように、世代を越えて対話する場面を設定する。

時間	活動内容	講師等
5分	開会あいさつ	中平 徹也さん 環境学習を通じた人材育成・まちづくりを考える協議会 会長
30分	発表 ○種松山のジオラマの制作と今後の展開 ○土石流、災害時の植物の機能、山林管理の問題 ○地元の史跡の千人塚から防災意識を高める	県立倉敷古城池高等学校
35分	レクチャー「私が第五福田小学校の避難所での経験から学んだこと」	尾崎 勝也さん 元倉敷市立第五福田小学校PTA会長、ミズシマ盛り上げ隊、防災士
15分	(休憩)	
10分	報告 ○備蓄食材を使った“カンパンスイーツ”づくり	県立倉敷古城池高等学校
45分	話し合ってみよう	中平 徹也さん 環境学習を通じた人材育成・まちづくりを考える協議会 会長
15分	振返り	前田 芳男先生 岡山大学地域総合研究センター副センター長 教授

○活動の様子（参加者の様子や声等）

発表「種松山のジオラマの制作と今後の展開」
茅野 立さん、松本 玲音さん（岡山県立倉敷古城池高等学校生物・園芸部2年）

岡山県立倉敷古城池高等学校生物・園芸部が制作した種松山のジオラマについて、完成したジオラマを披露しながら、その制作の過程や制作を通して学んだことを発表した。ジオラマは、地図にコルクボードを等高線に合わせて切ったものを何枚も重ねて高低差をつけることにより実際の地形を忠実に再現。使用したデザインカッターの刃が劣化して苦勞したエピソードや試行錯誤を繰り返した結果、目の前のジオラマが完成したことを伝えた。実際にジオラマを作ってみると、ハザードマップで危険箇所指定されている状況がよく分かったこと、反対にどうして危険箇所になっているか分からず疑問に思った場合は、実際にその場所に行ってみると、木が少なかったり、コンクリートで補強されていなかったりして土砂崩れが起こりやすくなっていたことが分かって納得できたことを発表した。



発表「土石流、災害時の植物の機能、山林管理の問題」

常長 千寛さん（岡山県立倉敷古城池高等学校 3年）

土石流の危険や、災害に対する植物の根の機能、樹種による根の生え方の違い、海岸沿いに植えるとよい樹種について学んだことを発表した。竹はケヤキ、ヒノキ、クスノキに比べて根の張り方が浅く、危険性が高いこと、山林の管理の重要性、また、持続可能な視点で管理をすることの重要性についても触れた。2年前に倉敷市真備地区で災害が発生した時に何もできなかった反省から、卒業後は大学で防災について学び、将来は地域の防災・減災の力になりたいという思いを伝えた。



発表「地元の史跡の千人塚から防災意識を高める」

難波 ひなのさん（岡山県立倉敷古城池高等学校 3年）



明治17年の高潮で犠牲となった546人のうち、身元不明の256人分の遺体を埋葬した、倉敷市広江に設けられた千人塚について調べた内容を発表した。調べた五十周忌、百周忌の様子や、災害の歴史を忘れないために、小学校の行事やイベントで振り返ったり、メディアや図書館の掲示で取り上げたりするといったアイデアを伝えた。

レクチャー「私が第五福田小学校の避難所での経験から学んだこと」

尾崎 勝也さん（元倉敷市立第五福田小学校PTA会長、ミズシマ盛り上げ隊、防災士）

平成30年7月西日本豪雨災害で、100世帯近く約260人の避難者を受け入れた倉敷市立第五福田小学校のおよそ2ヶ月にわたるボランティア経験を伝えた。尾崎さんは商店街で電気屋を営んでいたため、避難所設置当初に扇風機が必要となったことがきっかけで、避難所支援に関わることになった。災害規模が大きく、自宅から遠く離れた水島での避難所では、避難者同士のコミュニティが築かれていない状態であった。そのような状況の中で避難所運営会議を通して自治を呼びかけて避難所運営に携わった経験を語った。また、最初は子供会の20～30人が物資の受入れ等の対応をしていたが、長期化にともなってボランティアスタッフにも限界が生じて、ボランティア会議を開催するに至ったことなどを伝えた。最後に学んだこととして、助け合えるまちの大切さや自主防災組織の必要性を感じたことなどを話して締めくくった。



報告「備蓄食材を使った“カンパンスイーツ”づくり」

黒瀬 陽織さん（岡山県立倉敷古城池高等学校生物・園芸部2年）



消費期限が切れないように備蓄食材を消費し、新たな備蓄食材を買い足す際に、消費するカンパンを美味しく食べられる“カンパンスイーツ”づくりの取組を報告した。高校生の視点で、カンパンをタルト生地に見立てて使用したり、チョコレートに混ぜてクランチチョコレートを作ったりするなどユニークなアイデアで会場の雰囲気が和んだ。“カンパンスイーツ”を定期的に食べることによって、防災意識が低くならないように意識したいとの提案であった。

話し合ってみよう

中平 徹也さん（環境学習を通じた人材育成・まちづくりを考える協議会 会長）

中平さんがファシリテーターを務め、参加者は高校生を含む4～5人の7グループに分かれて、次に示す話題について感想や意見を話し合った。

- 自己紹介と本日の感想
- 災害の私のイメージ「私なりにこう思う」
- 防災・減災のためにこんなことができれば
- 私の宣言「今日から〇〇します」

どの話題も、まずは各自で考えてからA4の紙1枚に記入し、それを示しながらグループ内で話し合った。どのグループも高校生の存在がよい刺激となり、和やかな雰囲気では話し合いが進んだ。最後は一人一人が本日の学びを踏まえてA4の紙に書いた「私の宣言」を自分の席に提示し、それを全員で見て回ることで全員の思いを共有した。高校生は代表として全員が前に出て、「私の宣言」を発表した。



振り返り

前田 芳男先生（岡山大学 地域総合研究センター副センター長 教授）

（高校生の発表について講評）

- 自分でジオラマを作るとは、自分の手を使って、自分の頭で土地勘をつかむことができるので意義のある活動だ。
- 「（防災・減災で重要な役割を果たす）樹木を誰が管理していくのか」という継承についてまとめて触れられていたが、持続可能という視点で考えられている。
- 千人塚の発表では、碑文を暗唱するという取組に触れられていたが、そのことを伝えたいという気持ちが表れていた。
- 防災食を定期的に楽しんで食べることは大切である。防災食を食べることが防災について考える機会となる。防災についてのよいサイクルを地域に定着できるように、幼稚園や保育園で防災食を一緒に作って食べるなどの展開を目指してほしい。



【講座の参加者アンケートの結果より】

- 「防災・減災への関心は高まりましたか」という質問に対して91%の人が「高まった」と回答
- 「内容はいかがでしたか」という質問に対して90%の人が「とても参考になった」、3%の人が「少し参考になった」と回答
- 参加者からは「高校生が地域を愛し、防災にそれほどまでに取り組んでいることに感動した。」「高校生の素晴らしさを感じて、未来は暗くないかもという気持ちになった。」「意欲的な高校生と一緒に参加できて、楽しく刺激になった。」など、参加者の意欲や関心の高まりを感じさせる記述が多くあった。
- 高校生を含めた幅広い世代の人や様々な立場の人による交流の機会が「刺激になった」「参考になった」という記述が多く、参加者一人一人の学びを深めることができた様子がうかがえた。

【倉敷古城池高校 生物・園芸部にインタビュー】

「高校生と一緒に考えよう 私たちのまちの防災」で活躍した、倉敷古城池高校の生物・園芸部の茅野 立さん、松本 玲音さん、佐藤 力さん、顧問の山口 裕子先生にインタビューを実施した。

ジオラマ制作を通して感じたことや学んだことは？

(茅野) 最初、自分たちに何ができるかを考えました。ジオラマを作って、ため池の決壊を想定して砂や水を流してみてもうかなどと考えてジオラマ制作に取りかかりました。(前田先生の) アドバイスを受けて、途中から山の形が見えてきて、自分が通っているところの地形が見えてきた時は感動しました。

(松本) 貼り付ける作業をしていましたが、場所によって傾きが違って、危険そうなところがハザードマップでも警戒されていることが確認できました。

(茅野) 行ってみると角度は緩やかだけど、舗装されていないことなどが分かりました。



茅野 立さん

発表に向けて思ったことや考えたことは？

(茅野) 最初、防災のことが分からなかったのどこから伝えたらよいか迷いました。分からない人にどう伝えたらよいか考えました。

(松本) 最初は茅野さんをサポートするつもりでしたが、自分も知りたい気持ちになってきました。参加して、いろんな人の意見を聞くことができて良かったです。

2人は土砂災害等の危険性の高い場所に住んでいないので、今までは災害について考えることがなかったが、平成30年7月に発生した西日本豪雨災害で倉敷市真備地区が被災したのをきっかけに防災・減災について考えるようになったようだ。

発表を終えての感想は？

(茅野) 災害の危険性だけではなく、具体的な避難等の対策まで伝えることができればよかったと思いました。どんな警報が出たら避難する必要があり、どこに避難すればよいかを伝えたいかったです。

(松本) ニュースで危ないと言っているけど、ずっと住んでいる人は自分は何年もそこに住んでいて大丈夫だったから大丈夫という考えになってしまうので、どんな時に避難しなければならないかが伝わらないといけないと思います。特に今は、新型コロナウイルスのこともあるから、すぐに逃げる判断ができなくなっていると思います。



松本 玲音さん

地域の人と話し合っただけで感じたことや学んだことは？

(佐藤) 地域の人から、自分のことだけでなく他の人のこともすごく考えていることを知りました。災害があった時に助け合えるように思えて安心しました。

(松本) 自分の命を自分で守ればよいと考えていましたが、地域の人から避難所の立場で話しているのを聞いて、情報を交換することの大切さや、ただ自分の命を守るだけじゃなくて、どう行動するかが大切であることが分かりました。

(茅野) 今まで高校生としか話し合ったことがなかったけど、いろんな年齢層の、いろんな経験をした人と話し合うことができ、経験による考え方の違いを感じることができました。そういった考え方も踏まえながらさらに自分の考え方を深めることができ、よい経験になりました。

今後、防災の視点で取り組みたいことは？

(佐藤) 自分で足を使って、どこが危険か調べて、もっと考えていきたいです。どんな時に逃げなければいけないのか覚えておきたいと思いました。

(松本) 災害が起こったら冷静な判断ができず、あれを持っておけばよかったと後悔することもあると思うので、今から準備をしておくべきだと思いました。

(茅野) 災害が起きたらすぐに逃げられるように防災グッズを用意しておき、分かりやすい場所に置いておきたいです。また、「災害用伝言ダイヤル(171)」の利用について家族で話し合っておきたいと思いました。自分の地域で一度起きた災害については確認して、二の舞にならないように対策を考えておくべきだと思いました。



佐藤 力さん

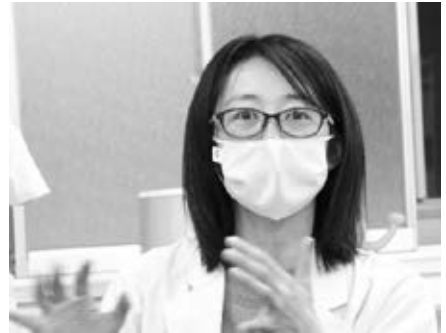
最後に、顧問の山口 裕子先生に話を聞いた。

講座に高校生が参加することについて

(山口) 自分たちの取組が、直接社会の役に立ち、危機に直面した時に人の命を救うことに直結してくるということは、これから先の学びやモチベーションにつながっていると思います。今回、公民館で発表して地域の方に聴いていただけたというところにも魅力を感じました。情報系の大学を志望している生徒が、情報のツールや技術を使って防災のシミュレーションをしたり、様々な立場や国籍の人に避難を呼びかけるにはどうすればよいかを考えたりするなど、モチベーションがあると、学びたいことのツールをもっと活用できたり、将来のイメージが湧いたりすると思うので、(今回の講座に参加できて) 非常によかったと思っています。

当日の様子について

(山口) 思ったより緊張していませんでした。むしろ堂々としていたように思えました。温かく聴いてもらえたり、「すごいね」って言ってもらえたりすると生徒の自己肯定感も上がります。地域に出て行くと、得られるものがたくさんあります。温かく迎えてくださり、受け入れてもらえる場を提供してくださる地域があるということは財産なので、大切にしていきたいと思いました。



山口 裕子先生

今回の取組を振り返って

(山口) 高校生は素直で「すぐに行動しないと」「家族に言わないと」と思ってくれます。そして、子どもたちが動くと大人も動いてくれます。そういったところから働きかけるのは効果的だと思っています。今年は新型コロナウイルスの影響でカンパンスイーツを作って食べることができませんでしたが、今後も楽しみながら意識を高めていくことができたらいいなと思っています。



インタビューに答えてくれた
倉敷古城池高校の生物・園芸部

○活動を終えて（関係者の振り返り、成果と課題）

講座を受講した地域の方から、高校生の考えを聞いたことや一緒に学ぶことができたことが嬉しかったと喜びの声がたくさん寄せられたことで、藤原さんは、高校生が科学的に研究した内容を地域に向けて発表し、多世代が学び合うこの方法はよかったという手応えを感じている。

水島にはコンビナートがあり、防災教育について取り組むなら、危険物を扱う工場が多く立地する地域の特性を踏まえた内容を取り扱いたい。しかし、今回はそのような内容に触れていない。それは高校生が自主的に学ぶ姿勢を大切にしたいという藤原さんの考えからである。防災学習を始めるにあたって、まずは高校生にとって身近な自分たちの生活する地域のことについて、ジオラマ制作を通して学習することから始めるように計画した。学習するうちに、防災について興味を持ち、自ら学習を深めてくれるようになればいいと藤原さんは考えた。実際に災害についての学習を始めると、水島は干拓地で、地震が起こった際に液状化現象が起こる可能性があることに生徒が気づき、興味を示した。このような流れの中で、コンビナートがあることの利点や及ぼす影響、災害時の危険性について考えた防災学習に、将来的に取り組んでくれたらいいと考えている。今回の講座「高校生と一緒に考えよう 私たちのまちの防災」では、倉敷古城池高校との協働により、地域に「防災・減災の学びの場」をつくった。今後は水島コンビナートと隣接するこのまちで、この学びを継続し、発展させていきたいと考えている。

そして、水島で育った子どもたちが、水島が経験した公害の歴史や、豊かな自然の回復を目指して活動している様子を知り、地域に愛着を持つことができるようになってほしいと考えている。

○考察（担当者より）

「高校生と一緒に考えよう 私たちのまちの防災」の事例で注目したい点は、第1に倉敷古城池高校と協働で取り組んでいる点、第2にタイトルの「私たちのまち」に表されるように自分たちの地域を常に講座の中心に位置づけている点である。

第1の倉敷古城池高校との協働で取り組んでいる点について注目したい。講座はみずしま財団の藤原さんの防災の視点で地域づくりに取り組み、災害に強い人を育成するというねらいで実施されているが、高校生は試行錯誤を繰り返しながらジオラマ制作やカンパンスイーツづくりに取り組み、防災について学んだことをまとめて地域の方に向けて発表した。今回の発表を通して伝えられた若い世代の防災に対する考えや思いは地域の方に刺激を与え、高校生は自分たちの活動の成果が認められることにより自己肯定感や自尊感情を

育むことにつながるとともに、自分たちが活動することによって地域をよりよくできるということを実感することができたのではないだろうか。また、高校生は日頃あまり話す機会のない多様な世代との交流を通して、地域の方の防災や地域づくりに関する考えや思いに直接触れながら、自分の考えや思いと響かせ合うことができた。地域の方はもちろん、高校生にとっても多様な意見や考え方を学ぶ貴重な経験となったのではなかろうか。

続いて、第2の自分たちの地域を常に講座の中心に位置づけている点について注目したい。今回の講座で考えているのは、「どこか」のことではなく、「私たちのまち」のことである。防災教育を実施する上で、地域の特性や起こる可能性のある災害を想定し、参加者のニーズに応じた取組を考えることは重要なポイントの1つである。今回の講座では、地元の高校生による周辺地域のジオラマや地元の史跡についての発表、比較的近い場所で受け入れた避難所での経験のレクチャーなど、参加者にとって興味・関心を持ちやすい身近な内容で構成されている。このことは参加することに対する動機付けになるだけでなく、講座の中で参加者が考えや学びを共有する上でも効果的に働き、最終的には参加者の防災・減災に関する意識を高め、さらには、参加者がそれぞれの立場で自分にできることを具体的に考えて発表することにより、参加者一人一人の実践を促している。つまりは、ねらいである「災害に強い人づくり」を達成することに大きな効果を与えている。

以上の2点から、この防災学習プログラム「高校生と一緒に考えよう 私たちのまちの防災」の事例は、参加者の防災・減災に関する意識と意欲を高め、災害に強い地域づくりや災害に強い人づくりにおいて効果的であったと言える。

今回の講座は新型コロナウイルス感染拡大の影響を受け、大幅な内容の変更を余儀なくされた。当初の予定では全3回にわたる講座を開催し、ジオラマを使ってため池が決壊した状況をシミュレーションする実験を行ったり、高校生が作ったカンパンスイーツを実際に食べてみたりするなどの展開が考えられていたが、残念ながら今回は1回のみの開催となった。

みずしま財団の藤原さんと倉敷古城池高校には、ぜひ今回のように高校生が学んだことや取り組んだ成果を発表し、地域の方と学びを深めるという取組を1年に1回でもいいので継続的に開催してほしい。そして、防災について高校生と地域の方が一緒に学ぶ機会を地域に定着させることにより、災害に強い人づくりを進め、災害に強い地域となることを期待している。

防災語ろう会

岡山市立興除公民館 藤井 裕子さん



目的：地域の防災・減災力を高めるための学びの場をつくり、地域防災活動の支援、促進を図る。

主催：岡山市立興除公民館

対象：各学区で防災に関わっている人、防災に関心のある人

○防災学習プログラム作成の経緯（立案者の意図、思い、地域や対象者に関する課題等）

事例の実践者は岡山市立興除公民館の社会教育主事 藤井 裕子さん。藤井さんは、東日本大震災後、毎年のように全国各地で大規模災害が大きな被害をもたらしている状況から防災・減災に関する学習の必要性を感じ、防災学習に取り組もうと考えた。

興除地区は古くは「吉備の穴海」と呼ばれ干拓を繰り返してできた農業地帯の一角で、平坦な土地が広がっている。近年、比較的大災害が少なく、地域住民の防災意識の低さが懸念されるところであった。また、地域の高齢化が進み、近い将来発生することが予測されている南海トラフ地震の対策からも、地域住民が主体となって防災・減災に取り組むことができるように自助や共助の意識を高めることが必要である。南海トラフ地震はいつ起こるか分からないし、防災に対する備えが必要とされる場面がすぐに来るとは限らない。しかし、次の世代のためにも災害に強い地域づくりを進める必要がある。

そこで、平成30年度の西日本豪雨災害で倉敷市真備地区が被災し、防災・減災に取り組む機運が高まっている今が防災学習に取り組む好機ととらえ、参加者が防災を自分事として考えることができるように、また同時に、防災をテーマとして性別や年齢、障がいの有無といった住民の多様性についても学べるように、令和元年度公民館主催講座として「さんかくカレッジ」基礎コース「災害が起こる前に考えておきたいこと～あなたは『大切なもの』を守れますか？～」(4回講座)を開催した。講座には、一般市民の他に地域の自主防災組織の代表や町内会長、

令和元年度 岡山市男女共同参画大学「さんかくカレッジ」基礎コース

災害が起こる前に 考えておきたいこと

～あなたは『大切なもの』を守れますか？～

「晴れの国おかやま」を豪雨災害が襲った平成30年の記憶は、まだ新しいところで、近年の激しい気象変化の中で、私たちは再び災害に見舞われる確率が高くなってきたと言えるでしょう。そして、同じ災害を経験しても男性・女性・障害の有無・年代など、様々な立場によって受ける被害が違ってくることも、過去の災害を通じて明らかになってきました。今後災害が起こっても、誰一人取り残されずに助かるための知恵を、一緒に学んでいきましょう！

回	日にち	タイトル	講師
第1回	12/2 (月) 10時～12時	一人ひとりが大切にされるために ～地域は“多様な立場”の住民の集合体～ あちこちの被災地で活動して来た講師から、災害現場でどんな事が起こっているかお話しします。	栗木 剛さん (motte ひょうご 事務局長)
第2回	12/16 (月) 10時～12時	住民の中の “多様な立場”を考えよう① 地域にはどんな人たちがいるでしょうか。災害が起きた時、配慮や支援が必要なのは誰でしょうか。ゲームを通して考えましょう。	徳田 恭子さん (NPO 法人まちづくり推進機構岡山代表理事)
第3回	1/20 (月) 10時～12時	【真備町からのメッセージ】 ～あの日、町で何が起ったのか～ 真備町で被災した方と、被災した高齢者を支援した方の体験を聞きながら、災害に備える知恵を出し合います。	峰山 洋子さん (岡山生涯学習インストラクター協会顧問) 津田 由起子さん (小規模多機能ホーム「ぶどうの家真備」代表)
第4回	2/3 (月) 10時～12時	住民の中の “多様な立場”を考えよう② これまでの学習をもとに、自分自身は災害の時にどう動くのか、具体的に考えてみましょう。	岡山市 男女共同参画社会推進センター 「さんかく岡山」職員

☆会場：岡山市立興除公民館 ☆受講料：無料 ☆定員：30名(先着順)

◆お申込み・お問い合わせ先◆
岡山市立興除公民館 岡山市南区中津 589-1 (興除中学校東隣)
Tel/Fax 086/298-2660
E-mail koujokouminkan@city.okayama.lg.jp

<主催 岡山市立興除公民館・岡山市男女共同参画社会推進センター「さんかく岡山」>

裏面もご覧ください。

令和元年度
岡山市男女共同参画大学「さんかくカレッジ」基礎コース
「災害が起こる前に考えておきたいこと
～あなたは『大切なもの』を守れますか？～」

福祉施設の職員なども含めた約40人が集まった。

講座の際に受講生から、「各地区で避難訓練などの防災・減災に関する様々な取組が行われているが、地域住民の自助の意識がなかなか高まらない」といった話や、自主防災組織を新たに設立した関係者からは「具体的に何から始めればよいか分からない」といった話が聞こえてきた。また、講座の参加者は町内会長や自主防災組織の関係者といった特定の立場にある人も多く、そのような人たちの共助の意識の高まりは感じつつも、地域住民全体の自助の意識を高めるという点においては、思うような結果が得られていないことが分かった。

そこで次のステップとして、地域の防災・減災力を高めるための学びの場として、また地域の防災組織の学習支援も見据え、主催講座「防災語ろう会」を企画した。そして当会を通じて、様々な立場の人が防災に関する悩みや課題、その解決に向けた取組について話し合うことにより、各地区で行われる防災・減災に関する取組の充実と課題の解決を支援しようと考えた。現在「防災語ろう会」には約20人の市民が参加している。

○実施に向けて〔打合せ（関係機関との連携の様子）、参加者への広報、準備等〕

令和元年度の講座で、地域住民の自助の意識を高めるために「フラットな立場で、何ができるかを話し合ってみませんか。」と受講している町内会長や自主防災組織の代表などに、声をかけてメンバーを集め、令和2年度に向けて作戦会議（準備）を行った。「防災語ろう会」という会の名前は参加者が気軽に語り合うことに重きを置いて、この時に考えられたものである。各会の実施においては、参加者が主体的に学習に取り組むことができるように、作戦会議のメンバーと一緒にテーマや活動内容を考えた。各地区によって防災に取り組んできた年数や地域の現状に違いがあるが、お互いの実践内容について情報共有や意見交換を通して地域の防災に前向きに取り組んでいる人たちをつなぎ、地域のネットワークを作ることが、地域の防災力を高めるための基盤となると考えた。

岡山市立興除公民館
藤井 裕子さん



防災学習プログラム

防 災 語 ろ う 会

対象：各学区で防災に関わっている人、防災に関心のある人

現状と課題

○地域で防災に関する取組は行われているが、自助の意識が十分に地域に浸透しない。訓練の際、非常持出袋を持ってくる人が少ないなど防災に対する意識自体が低い。また、高齢を理由に訓練に参加しない人もいる。

ね ら い

○地域に防災・減災に関する学びの場をつくり、参加者の自助の意識を高めるとともに、既に防災活動を行っている人やこれから始めようという人をつなげることにより、地域の防災組織の支援とネットワークづくりを行い、地域の防災力を高める。

【目指す状態】 ○各地区で住民の防災・減災に対する意識を高める実践が行われ、地域住民の自助意識が高まる。

連 携 先

○町内会長や民生委員
○自主防災組織の代表 等

実施のポイント（広報、経費など）

- 前年度の興除公民館主催講座「さんかくカレッジ」基礎コース「災害が起こる前に考えておきたいこと～あなたは『大切なもの』を守れますか？～」を受講した町内会長や民生委員、自主防災組織の関係者等に働きかけ、準備の段階から参加してもらうことにより、様々な主体を巻き込んで、各地区の防災・減災に関する取組を支援する。
- 公民館だよりに前回の「防災語ろう会」の報告と次回のお知らせを掲載する。

活動に向けて（工夫点、注意点など）

- 各回の講座終了時に感想と一緒にアンケート調査を行うなどして参加者の声を集めたり、関係者に聞き取りを行ったりして、参加者が学びたい内容や聴きたい講師の話を講座に取り入れる。
- 行政など関係諸機関に、資料提供や指導を積極的に依頼する。

実施の詳細 令和2年4月～令和3年3月 毎月第1土曜日 10:00～12:00（120分）

開催	活動・活動内容	講師及び情報提供者
4月	備蓄品や非常持出品の提案	上木 英夫さん（中畦南第一町内会長） 三宅 敬子さん（北区吉備学区在住）
5月	（緊急事態宣言が発出されたため中止）	
6月	中学校での防災学習の取組について	河内 真理子 館長 岡山市立興除公民館 （前岡山市立興除中学校長）
7月	身近な浸水被害(内水)に備える出前講座	岡山市下水道河川計画課
8月	マイ・タイムラインに関する学習 （「逃げキッド」を利用して学習）	
9月	8月末に行われた興除中学校区内の 防災訓練に関する情報交換と意見交換	田中 泰弘さん 東畦学区防災会
10月	避難所運営の実際について	飯田 啓 校長 岡山市立東疇小学校 （前倉敷市立第五福田小学校長）
11月	地震・台風・防災行動 ～自信をもって避難する～	中島 望さん 気象予報士・防災士
12月	大地震に対する防災について 話し合うワークショップ	

※本調査では令和2年12月までの実践についてまとめている。

○活動の様子（参加者の様子や声等）

第1回 4月4日（土）
「備蓄品や非常持出品の提案」

9人参加

第1回目の「防災語ろう会」では、最初にメンバーの一人でもある中畦南第一町内会長 上木 英夫さんが3月に町内で行った防災学習の内容をこの会でも共有するため、報告があった。当日講師としてお越しいただいたNPO法人ピースウィンズ・ジャパンから平成30年西日本豪雨災害で被災した倉敷市真備地区での支援の取組や当時の被害と避難状況を、時系列をおって説明されたことが紹介された。また、西日本豪雨災害をきっかけに非常持出品と備蓄品を自主的に準備している、会のメンバーの三宅 敬子さん（他学区在住）にその中身を紹介してもらったり、各地区の防災訓練の計画などが話し合われたりした。最後に、今後の「防災語ろう会」の持ち方や取り扱いたい内容等について話し合われた。



非常持出品等の紹介

第2回 6月6日(土)
「中学校での防災学習の取組について」

12人参加

6月の「防災語ろう会」では、岡山市立興除中学校の前校長である岡山市立興除公民館 河内 真理子 館長が中学校での防災の取組を紹介した。平成26年に岡山市の「実践的防災教育総合支援事業」で同校の生徒と教員の数名が宮城県気仙沼市を訪れ、中学生が積極的に避難所運営に関わった話を聞き、防災教育の重要性を感じたことから学習が始まり、その後教育課程に組み込んだ。主に1年時、地域学習の一環として防災教育を行っている。始めに防災意識調査を行い、意見交換やグループ討議を通して防災の予備知識を学んだ後、学区内の現状を把握するためのフィールドワークを行い、ハザードマップの作成等を行っている。また、避難所生活を送ることになった場合を想定した防災キャンプ体験、備蓄食実習、救命・応急手当実習、防災新聞作成・発表等に取り組んだこと、年度により生徒たちが地域の防災訓練に参加し、実践を発表した年もあったことなどを紹介した。



岡山市立興除公民館
河内 真理子 館長

第3回 7月4日(土)
「身近な浸水被害(内水)に備える出前講座」

21人参加

岡山市下水道河川計画課

7月は「身近な浸水被害(内水)に備える出前講座」(岡山市下水道河川計画課)による学習会が行われた。最初に、岡山市南部は海拔が低いところが多く、水害に弱い地域特性があることが説明され、内水ハザードマップの活用方法や正確な災害情報の入手先等が紹介された。さらには警戒レベルによる避難のタイミングや内水氾濫における対策、避難時の留意点(自助や共助)、岡山市の取組(公助)について詳しく説明された。

第4回 8月1日(土)
「マイ・タイムラインに関する学習(「逃げキッド」を利用して学習)」

16人参加

8月は各地区で行われる避難所運営に関する情報交換と、マイ・タイムラインについての学習会が行われた。情報交換では、新型コロナウイルス感染防止対策について「どのような準備が必要か」「受付で密にならないようにするには」を中心に、各地区での避難所運営や防災訓練の取組や課題について意見が交わされた。また、マイ・タイムラインに関する学習は、逃げキッド(国土交通省中国地方整備局)を活用し、動画を視聴しながら行われた。



実際にマイ・タイムラインを作成することにより、自らが関係する水害リスクを知り、どのような行動が必要か、どういうタイミングで避難すればよいかを考えることができるということを学んだ。

第5回 9月5日(土)

15人参加

「8月末に行われた興除中学校区内の防災訓練に関する情報交換と意見交換」

9月の「防災語ろう会」では、岡山市立東疇小学校で8月29日に行われた第8回東畦学区防災訓練と、岡山市立興除小学校で8月30日に行われた岡山市総合防災訓練の報告が行われた。東畦学区防災訓練は東畦学区防災会の主催で、避難所となる体育館に新型コロナウイルス感染防止を考慮して居住スペースを設置した結果、収容できる人数が計画より大幅に少なくなり、不足するスペースへの対応が課題となったことなどが報告された。また、岡山市総合防災訓練は岡山市主催で、避難所の受付訓練では窓口が大変混雑し、受付の担当者が慌てていた姿が見られたことなどが報告され、今後の工夫や課題に対する意見交換等が行われた。



東畦学区防災会副会長
田中 泰弘さん

第6回 10月3日(土)

14人参加

「避難所運営の実際について」

岡山市立東疇小学校 飯田 啓 校長(前倉敷市立第五福田小学校長)

10月の「防災語ろう会」では、避難所運営の体験談と、マイ・タイムラインの発表が行われた。東疇小学校の飯田校長が平成30年7月豪雨災害発生時、倉敷市立第五福田小学校で避難所として、300名を超える真備町避難者を受け入れた体験を発表した。大変な経験の中、日頃から防災に対する意識を高めることや知識理解を深めること、コミュニティの大切さ、それぞれの技術、技能、資格を生かすことの大切さを実感したとの話であった。



最後に、前回の講座を受講して、実際にマイ・タイムラインを作成した方からの報告が行われ、作成時の留意点や疑問点について発表があった。

第7回 11月7日(土)

46人参加

「地震・台風・防災行動 ～自信をもって避難する～」

中島 望さん(NHK 岡山放送局 気象予報士・防災士)

11月の「防災語ろう会」では、千葉県で東日本大震災を経験し、自ら防災士の資格を取得している NHK 岡山放送局の気象予報士 中島 望さんを講師に迎え、避難のタイミングを見極めるための気象情報の活用についての講演が行われた。東日本大震災の発災時、地震でできた亀裂や揺れ動く地面の中から水が溢れ出る液状化現象の生々しい映像とともに、発災直後の避難の経験等が語られた。

また、気象庁のホームページから地域の河川の氾濫情報等を得る方法についても紹介され、参加者は自分のスマホで実際に検索する体験をした。最後に災害が多発している



今の時代、防災や減災に加えて、自らの命を守るために勇気を持って住む場所を離れる『避難』という考え方についても紹介された。

第8回 12月5日(土)

12人参加

「大地震に対する防災について話し合うワークショップ」

今までの「防災語ろう会」では、台風の接近や前線の発達による大雨災害を想定した内容が中心だったが、12月は、これから始める大地震に対する防災学習について、参加者の学びたいことを整理するためのワークショップが行われた。



ワークショップでは「大地震に対して、あなたが心配に感じていることはどんなことですか」「大地震に備えるために、あなたが特に知りたいことはどんなことですか」についてそれぞれ個人で付箋に記入し、3人組のグループの中で発表することによりお互いの考えや思いを共有した。その話し合いをもとに「大地震について、1月以降に学びたいことや知りたいこと」をグループの中で話し合って3つまでしぼり、グループごとに発表して全体で共有した。

「震災を体験した人から体験を聞きたい」「一人暮らしの高齢者など要支援者に対する具体的な取組について学びたい」といった参加者の視点で学びたい内容が発表された。

○活動を終えて（関係者の振り返り、成果と課題）

今年度、地域で防災にかかわっている自主防災組織の方を始めとする様々な参加者の声を集めながら、各回の取り扱う内容や講師を設定し、毎月1回定期的に情報や学びが得られる場として「防災語ろう会」を開催した。最初は前年度の「災害が起こる前に考えておきたいこと～あなたは『大切なもの』を守れますか？～」の修了者が中心のメンバー構成であったが、口コミで集まった参加者も増えてきた。「どなたでも、いつからでも、ご参加いただけます。興味のある方はぜひおいでください。」と参加を呼びかけた結果、年齢、性別にとらわれず、様々な立場の人が参加し、自由につながることができている。中には「公民館で（防災について）学ぶことはない」とあまり前向きではなかった参加者の一人が、

「次はこんなことについて学びたい」と次第に興味を持って参加するようになるなど、回を重ねるごとに主体的に学習に取り組むようになった人もいます。

また、自主防災組織は地区ごとに設立されて各地区で独自に取り組まれてきたが、



情報交換や課題の解決に向けた話し合いを通して、他の地区の取組を実際に見学するなど、防災組織の関係者同士のつながりが生まれた。

さらには、学んだことを自分の地域の自主防災組織の活動に取り入れたり、地域の住民に知らせるための資料を作成して配付したりするなど、自主防災組織の取組の支援になっているという話も聞こえてきた。

このように「防災語ろう会」がねらいとした「参加者の自助の意識を高めること」や「地域の防災組織の支援とネットワークづくり」という点に対しては、手応えを感じている。

その一方で今後の課題として考えているのが地域住民の自助の意識の向上である。参加者の「こんなことを学びたい」という思いを大切にしながら、その声を集めて毎回の講座内容を決めている。言い換えれば、先々の内容が決まっていないため、通常の講座のような広報ができず、広く参加者を募れていない。そのため、参加者の学習の深まりや自助意識の向上に対しては成果が見られるものの、地域住民全体の自助意識の向上という点に関してはまだ十分には取り組めていない。藤井さんはその点を今後の課題として、各地区の自主防災組織の関係者と一緒に知恵を出し合い、地域に自助の意識を広げるための方法を探りながら取り組んでいきたいと考えている。

○考察（担当者より）

岡山市立興除公民館の「防災語ろう会」の事例で注目したいポイントは、自主防災組織の関係者や地域住民の声に耳を傾け、地域の防災・減災力を高めるため、また地域の防災組織の学習支援も見据えて、「できることから始めませんか。」と学びの場をつくり上げ、それを毎月定期的に開催している点である。

藤井さんは、防災・減災について自助の意識が十分に地域に浸透していないことを課題の1つとしてとらえ、まずは前年度の講座を通じて集まった自主防災組織の代表や町内会長等の地域のキーパーソンも上手に巻き込んで、気軽に学ぶ場であるこの会を立ち上げた。

この時の「できることから始める」という姿勢は、防災・減災について取り組む上でとても重要である。そして、参加者の「こんなことを学びたい」という声をもとに各回のテーマ設定を行っている。参加者の中には自主防災組織の代表といった防災・減災に関して意識の高い人が集まっていて、時には、設定したテーマについて詳しく聞きたい人が新たに参加することもあった。その結果、参加者のネットワークを通じてつながった人や、被



災地の支援に携わった経験のある人に講師を依頼することができた。また、興除公民館の館長は、隣接している興除中学校の前校長で、6月には中学校での防災学習の取組を紹介した。以前、中学校は地域からの依頼で防災訓練に参加して実践発表を行うなどしてきたが、その取組を知らない参加者もいたことが分かった。「できることから始める」ことにより、中学校での防災学習の成果をもっと地域で生かすことができるのではないかということに気付くことができたのである。

そして、もう1つの重要なポイントは毎月1回のペースで継続的に「防災語ろう会」を開催することができている点である。新型コロナウイルス感染拡大による非常事態宣言の発出により5月は中止せざるを得なかったが、毎月テーマを設定しながら講座を開催するのは大変なことである。藤井さんは、事前に関係者に話を聞いたり、新たな参加者に声をかけたりしながら、時にはアンケートを実施し、常に参加者の「知りたいこと」「学びたいこと」を集めている。その結果、台風が発生して大雨災害のリスクが高まる頃に内水氾濫について学んだり、各地域で避難訓練を行った際には、事前の計画や実施後の成果と課題について情報提供を受けたりするなど、参加者にとって貴重な学びの機会となっている。特に今年は、避難所運営において新型コロナウイルス感染防止対策を具体的にどうすればよいかという課題について早急に考える必要があった。そのため長く避難訓練に取り組んできた地域の関係者にとっても、この学びの場が果たす役割は大きかったと言える。このような不測の事態への対応が必要となった場合に対して、また、自主防災組織を立ち上げて間もない地域の関係者や新しく防災・減災に携わることとなった関係者にとって、気軽に学ぶこの会が継続的に開催されていることの意義は大きいということができる。

おやこ de 防災

～ 私に合った防災手段を見つけよう！～

NPO法人 岡山市子どもセンター



目的：乳幼児親子を対象に、防災・減災について親が学ぶ機会を通して、防災意識を高め、自分と子どもの命を守ることができるようにする。

主催：岡山市立興除公民館

令和2年度 岡山市立興除公民館「地域応援人づくり講座」〈防災編〉

共催：興除・曾根地区おやこクラブひよこ会

東畦地区おやこクラブひまわり会

対象：乳幼児親子（おやこクラブ会員）

○防災学習プログラム作成の経緯（立案者の意図、思い、地域や対象者に関する課題等）

このプログラムを実践した岡山市子どもセンターは平成13年4月の発足以来、子どもが豊かに育つ環境づくりを目指し、「舞台芸術鑑賞会」「みんな和やかサロン」「おかやまプレーパーク」「キッズフェスティバル」「夏休みフリー塾」等の子どもの文化芸術活動や子育て支援事業、子どもの体験活動に関する事業の企画、運営及び支援を行っている。その活動の1つに、災害が発生した時に子どもが自らの身体・命を守ることができるよう、遊びを通して学ぶ体験型の防災ワークショップがある。

子どもが育つ社会環境がますます厳しくなっている中で、岡山市子どもセンターは地域全体で子どもが育つ環境をよりよくしていけるように、社会状況に応じた活動の見直しを行っている。平成23年3月に東日本大震災が発生し、平成24年度からこくみん共済coopが地域社会への貢献活動の一環として「防災・減災活動」を始めた時から、岡山市子どもセンターはこくみん共済coopと連携を図りながら、体験型の防災ワークショップに取り組んできた。岡山市子どもセンターはそのワークショップに取り組む中で、実施してきたプログラムに、子どもにとってより身近でより実践的な内容を加えて実施したいと考ええるようになった。

大規模災害が発生した際、乳幼児親子は自力での避難が難しく、避難所生活においても困難な状況に陥りやすいので、災害に対して備えておくことが重要である。しかし、若い保護者の中には学習する機会が少なく、防災・減災に対する意識が低い人も少なくない。岡山市子どもセンターは、そのような若い保護者を対象にした防災・減災について学ぶ場をつくる必要があると考えた。また、乳幼児親子と関わっていく中で、公民館等で行われる防災・減災に関する講演会や避難訓練に参加したいと思っている乳幼児親子はいるが、実際には参加しにくい現状があることも分かった。

そこで、乳幼児親子を対象に、親子で体験する学習プログラムに取り組むたいと考えた。今回の実践は、親子でワークショップを体験する前半と、スタッフが同じ会場の少し離れたところで託児を行うことにより落ち着いて親同士で学ぶことのできる後半で構成された。前半のワークショップは、今までこくみん共済coopと連携して取り組んできたものである。後半は乳幼児の保護者目線で、災害発生時の状況を考えたり、災害に対する備えについて学んだりするように計画を立てた。

○実施に向けて〔打合せ（関係機関との連携の様子）、参加者への広報、準備等〕

岡山市子どもセンターは乳幼児親子を対象に防災・減災に関する学習を実施する場所として公民館を考え、そのつながりを大切にしている。それは、公民館が乳幼児親子を含む地域の人たちのために教育や文化に関する事業を行う拠点であり、岡山市子どもセンターが目指している子どもが豊かに育つ環境づくりを行うのに適した場所だからである。

そこで、岡山市子どもセンターは岡山市立興除公民館の社会教育主事の藤井裕子さんに話をしようと考えた。藤井さんとは元々面識があり、防災・減災に関して意欲的に取り組まれていることを知っていたので、一緒にできないかと話を持ちかけた。一方、興除公民館のおやこクラブは防災・減災について取り組んだこともあり、関心が高く、令和2年度は岡山市立興除公民館の興除・曾根地区おやこクラブひよこ会と東畦地区おやこクラブひまわり会で実施されることとなった。



岡山市子どもセンター
片山 由美子さん

岡山市子どもセンターは事前に興除公民館とおやこクラブの役員とで打合せを行った。そこで防災学習プログラムを提案するのと合わせて、おやこクラブの保護者の「聞きたいこと」「学びたいこと」を聞き取り、当日の防災学習プログラムを検討した。



岡山市子どもセンター
美咲 美佐子さん

防災学習プログラム

おやこ de 防災 ～ 私に合った防災手段を見つけよう! ～

対象：乳幼児と保護者（おやこクラブ会員）

現状と課題

○乳幼児親子は、地域でのつながりが薄く、地域で行われる避難訓練等の防災事業に参加しにくい傾向がある。また、学習する機会も少ないので、防災に関する知識や意識にばらつきがある。

ね ら い

○乳幼児親子を対象に「おやこ防災プログラム」を実施し、防災・減災について親が学ぶ機会を通して、防災意識を高め、自分が住んでいる地域のことを知り、自分と子どもの命を守ることができるようにする。

【目指す状態】 ○参加者が災害発生時の避難所生活・避難所運営のイメージを持つことができる。

○参加者が災害に備えた自分の具体的な行動を考えることができる。

連 携 先

（主催）岡山市立興除公民館

令和2年度 岡山市立興除公民館「地域応援人づくり講座」〈防災編〉

（共催）興除・曽根地区おやこクラブひよこ会

東畦地区おやこクラブひまわり会

（防災体験プログラム）こくみん共済 c o o p 〈全労済〉

実施のポイント（広報、経費など）

広報：おやこクラブ会員同士によるLINEやロコミ

【講師（岡山市子どもセンター）の準備物】

大型絵本『そなえる』（株式会社学習研究社）、

ブルーシート（卵の殻を敷き詰める）、防災グッズ、配付資料、

ごはんの準備（お米、鍋、カセットコンロ、カセットボンベ、ポリ袋、お皿、スプーン等）

【主催者（興除公民館）の準備物】

卵の殻（受講予定者を中心に公民館で呼びかけて収集）、足ふきタオル、ゴミ袋 等

活動に向けて（工夫点、注意点など）

○事前におやこクラブで受講予定者を中心にアンケートをとり、知りたいことを把握

○体験したり、身近な防災グッズの実物に触れたりすることができるように準備

時間	活動	内容
5分	開会行事	主催者あいさつ、趣旨説明、講師あいさつ
5分	大きな地震が起こった時を考える	大型絵本『そなえる』の読み聞かせをして大きな地震が起こった時のイメージを持つ
15分	自分の身体の守り方を身につける	『だんごむしのポーズ』を親子で体験する
15分	地震直後の家の中を模擬体験する	卵の殻を踏んで歩いてみて、対策を考える
10分	非常時の食事を体験する	カセットコンロを使って、ポリ袋（高密度ポリエチレン）で炊いたご飯を食べてみる
20分	災害が起こった時の生活を想像して話し合う	普段の自分たちの生活を振り返り、電気や水道が止まった時を想定して、対策を考える
5分	非常持出袋（リュックサック）の紹介	非常持出袋の中身の紹介、それを持って子どもと一緒に避難することの大変さを想像する
5分	避難場所について考える	ハザードマップを見ながら、自分が避難する場所を考える
10分	閉会行事	閉会あいさつ、アンケート記入

○活動の様子（参加者の様子や声等）

大きな地震が起こった時を考える

5分

大型絵本『そなえる』の読み聞かせが始まると、最初は保護者の近くにいた子どもたちが絵本の前に集まってきた。「大きな地震が起こったらどうなるかな？」大地震が起こった時のまちや部屋の様子が描かれたページがめくられると「車がガシャーンってなってる。」「電気がぐらぐらしてる。」子どもたちは次々に気になったところを指差しながら、大地震が起こった時の話に引き込まれていった。絵本はその後、地震が起こった時に帽子やかばん等の身近にある物で大切な頭や首を守るページへと進んだ。「こんな時どうするの？」と子どもたちに話しかけると、子どもたちは絵本のイラストを見ながら、絵本の子どもがどのように身を守っているかを夢中になって答えていた。

絵本の読み聞かせを通して、大地震について楽しみながら学ぶ雰囲気ができあがった。



「守らないといけない身体の大切なところはどこだろう？」と親子に問いかけて、頭と首を守らないといけないことを確認した後、子どもたちは合図に合わせて楽しく遊びながら『だんごむしのポーズ』をやってみる。1人でできない乳児の保護者はひざの上で我が子の頭におおいかぶさって自分自身と我が子の頭を守る場合を体験した。地震が発生した時に自分の身体を守る『だんごむしのポーズ』を親子で楽しみながら遊び感覚で身につけることができた。



地震直後の家の中を模擬体験する

15分

会場の後方に用意されたブルーシートの上には、割れたガラスに見立てた卵の殻が敷き詰められている。卵アレルギーのある子どもや保護者への対応について伝えられた後、靴下を脱いで準備ができた親子から順番にその上を裸足で歩いてみた。乳幼児を抱えた保護者は抱っこしたまま歩いた。まずは歩くことで痛さを体験することがねらいだ。体験が終わり、用意されたタオルで足の裏の卵の殻を拭いた後、地震が起こって家中のガラスが割れた状況で怪我をしないようにするにはどうすればいいかを親子で話し合った。新聞紙で作ることができるスリッパが紹介され、身の回りの物を使って柔軟に対応することが大切であることなどが伝えられた。



非常時の食事を体験する

10分

会場の一角でカセットコンロを使ってポリ袋で炊いておいたご飯が親子に配られた。親子はそれを試食しながら、非常時の食事について話を聞いた。ポリ袋は薄手のものではなく、少し厚手の高密度ポリエチレンのものが適していることや、ストックしておいたものを実際に食べてみて買い換えることが大切だということが、市販の保存食を示しながら伝えられた。中でも「子どもは食べたことがないと（災害等の非常時に）食べない。」という話が印象的であった。

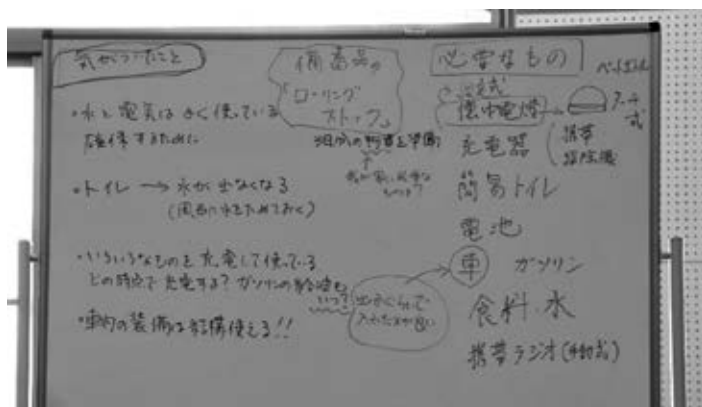


岡山市子どもセンター
宮内 和代さん

会場の一角に子どもたちが遊ぶことができるコーナーが用意され、遊びたい子どもはブロック遊びを始めた。その横で保護者は2つのグループに分かれ、輪になって集まった。「電気や水道、ガスが使えなくなったら、どうしたらいいのだろう？」岡山市子どもセンターのスタッフは、事前におやこクラブの参加者が今日の防災講座で知りたいと思ったことを話合いのテーマに設定した。まずは一人一人にバインダーに挟まれたワークシートと鉛筆が配られ、「朝起きてからお昼までにすること」と「その時に電気・水・ガスの何を使っているか」を書き出した。保護者は自分たちが日頃から何をどんな場面で使っているのかを具体的に考えることができた。



次に「水が使えなくなるのはどんな時？」「困らないようにするために必要な物は？」といった問いかけに、自分が災害にあった時を想像しながら、どんな備えをしておけばよいか意見を出し合った。話合いを通して「水はとにかくよく使っていること」が分か



り、1日で1人約3リットルの水が必要であることや、懐中電灯は手に持って使う以外にも電気スタンドのように立てられると便利であることなどが伝えられた。いざという時のため、どんな物を準備しておけばよいか、どのような備えをしておけばよいかということが話し合われた。

非常持出袋（リュックサック）の紹介

5分

会場の一角には、手軽に買うことができる災害時に役立つ防災グッズや、非常持出袋に入れておくとよい物などが展示されていた。展示されている物を見てみると、災害が発生した時に持っておきたい物がたくさんあることに気付く。子育て中の保護者が避難する時に必要な物を考えると、さらにたくさんの持ち物が必要であることは明らかだ。展示されている物が一通り紹介されたあと「防災グッズの入ったリュックサックを背負ってみてね」と声かけられた。そのリュックサックを背負い、我が子連れで逃げることは大変だ。自分と我が子が避難する状況を考えた上で、持ち運ぶ物を選んで非常持出袋を準備することが大切であることを学ぶことができた。



最後に参加している保護者に、地震に対する備えや必要な備蓄品、被災時の料理などに関する資料と一緒に、住んでいる地域の防災マップが配られた。自分の家の災害リスクや実際に避難する避難場所を確かめることは、防災・減災を自分事として取り組む上で絶対に必要だ。保護者は配られた防災マップを開いて、自分の家や付近の災害リスクや避難場所を確認することができた。

【講座の参加者アンケートの結果より（一部抜粋）】

- だんごむしのポーズは子どもたちも楽しみながら学ぶことができました。首と頭を守ることをだんごむしにたとえられていて分かりやすく、普段から遊びの中でやっていると子どももとっさにできそうだと思います。卵の殻を踏む体験は思っていたより痛かったです。実際体験してみて身近に感じたし、本当に地震が起こった時に裸足では危険なことが分かりました。
- 普段、防災用に非常食や簡易トイレ、水をストックしていますが、実際に使ったことはないの、今度使用してみようと思います。
- 災害について考えて防災グッズを用意していますが、“一般的に必要”と言われている物を準備しているだけで、実際の自分の生活とあわせて考えてみるとまだ足りない物があることに気付きました。
- 普段の生活の中で防災について考える機会がなく、今回参加して、水や電気を1日にたくさん使っていることに驚きました。また、避難場所を知ることができて安心しました。卵の殻も実体験ができてよかったです。
- シートを記入することで自分が具体的にどの場面で何を使っているか分かりやすかったです。何を用意しておけばいいかよく分かりました。グループで意見を交換することで気付いたこともたくさんありました。子どもも退屈することなく参加できてよかったです。

○活動を終えて（関係者の振り返り、成果と課題）

この防災学習プログラムはおやこクラブに参加している親子を対象に公民館で実施されたが、アンケートの内容からは、参加しやすく親子で楽しむことができたことが分かった。

『だんごむしのポーズ』『卵の殻踏み体験』『ポリ袋を使って炊いたご飯を食べる』等の活動は、親子で一緒に楽しみながら体験することができた。また、後半の話し合いの場面では、子どもたちがブロック遊びができるような場所を設けたり、見守るスタッフを割り当てたりするなどの配慮をすることにより、保護者が安心して話し合いに集中することができた。

今回の興除公民館での防災学習プログラムの実践を通して、おやこクラブで防災講座を実施することは通常の防災の学習や訓練に参加しにくい乳幼児親子が参加しやすく、乳幼児

親子にとって必要な防災に対する備えを中心に学びを深めることができたと思えを感じた。



ブロックで遊べる場所や眠くなった幼児のための布団などが準備され、保護者が講座に参加しやすい環境が整っていた。

また、事前におやこクラブの役員と話し合ったり、受講予定者の「知りたいこと」や「学びたいこと」を伝えてもらったりした上でグループでの話し合いをしたことは、参加者にとって災害に備えることを自分事として考えるきっかけづくりになってよかったとの感想がたくさん得られた。今回の講座の話し合いでは、朝から昼までの日常生活を思い出しながら、水・電気・ガスなどを使用している場面を考えたあとで、災害時のことを話し合った。この活動は、自分では思いつかなかった意見や情報を聞くことができたという好評であった。また、参加者がワークシートに記入したり、気付いたことを発表したりすることで、より自分事になるということも分かった。話し合いを通して、具体的にどのような物が必要で、どのような備えをしておけばよいかを考えることができたという感想が多かった。

会場には防災に関する資料や災害時に役立つ防災グッズを展示していたが、講座を終えた後に、これらを見た参加者から備蓄品や災害時の対策についての質問があり、話し合うこともできた。手軽に購入できる実物を展示することにより、自分の準備と比べたり、実際に子どもを連れて避難する際に持ち運ぶことを考えたりすることができてよかったと感じている。

○考察（担当者より）

「おやこ de 防災～私に合った防災手段を見つけよう!～」の事例で注目したい点は2つあり、1つ目は乳幼児親子を対象とした乳幼児親子のためのプログラムであること、2つ目は体験したり、身近な防災グッズの実物を見せたりするといった自助の知識や意識を高めるための様々な工夫がされていることである。

まず、「おやこ d e 防災」の実践が乳幼児親子を対象とした乳幼児親子のためのプログラムである点に注目したい。乳幼児親子は大規模災害が発生した際、自力での避難が難しく、避難所生活においても困難な状況に陥りやすいということや、防災・減災に関する講演会や避難訓練に参加しにくい現状がある。この実践はそんな乳幼児親子が集まるおやこクラブで取り組まれた。当日は岡山市子どもセンターやおやこクラブのスタッフによる様々な配慮や声かけがされていて、保護者が安心して参加できる環境が整っていた。そのような環境で、我が子と自分を守るために情報が得られ、自分たちにとって必要な備えについて具体的に学ぶことができる機会は乳幼児親子にとって貴重である。さらには、その学ぶ機会を通じて保護者同士のつながりができたり、深まったりすることが災害発生時に力を発揮するという点も重要なポイントである。

続いて、体験したり、身近な防災グッズの実物を見せたりするといった自助の知識や意識を高めるための様々な工夫がされていることについて注目する。この「おやこ d e 防災」の前半は、参加者が卵の殻踏みや災害時のご飯の試食等の体験をすることにより災害発生時を想像し、災害に対する備えの必要性を実感できるような構成になっている。防災・減災の学習に限ったことではないが、「楽しく体験する」ことは「話を聞く」ことよりも効果的である。例えば、参加者は卵の殻踏み体験をすることにより、災害時の窓ガラスが割れた大変な状態を想像し、様々な対応が求められる状況と日頃から備えをしておくことの必要性を理解することができる。さらに、災害の発生した状況を想像してどのような備えが必要で、何を置っておけばよいかが分かるように、会場には身近に購入できる具体的な防災グッズの実物が展示されている。そして、「おやこ d e 防災」の最後にはハザードマップが配付され、参加者自身が自分の家の周辺の災害リスクを把握し、いざという時のための避難所を確認する時間も設けられている。

防災・減災において、日頃から災害に備えて非常持出袋の準備や物資の備蓄をしておくことと、自身で状況を判断し、適切な避難行動を行うことができるようになることは重要である。この「おやこ d e 防災」の実践は、いろいろな体験を通して、災害に対する備えの必要性と具体的な準備について学ぶことができ、災害が発生した時に自らの命を自らが守ることができるようになるためのプログラムとなっている。

さまざまな人を包摂する 楽しい防災の試み ～ Happy ぼうさいプロジェクト～

特定非営利活動法人ふくおかNPOセンター 代表 古賀 桃子さん



目的：サイレント層に重きをおいた防災・減災のためのプログラム普及
主催：特定非営利活動法人ふくおかNPOセンター・那覇市若狭公民館 ほか
対象：地域活動等には疎遠な層の人たちをとりまく地域防災の各種ステークホルダー
（自治会・町内会・まちづくり協議会などの地縁組織、社会福祉協議会、
各種支援団体、行政、企業等）

○防災学習プログラム作成の経緯（立案者の意図、思い、地域や対象者に関する課題等）

ふくおかNPOセンターは2002年の設立以来、「草の根から、社会を描く。」を合言葉に、NPO等の組織マネジメント支援の他、企業・行政・公民館・社会福祉協議会・児童館等の多様な担い手間のコーディネーションや伴走支援等、多角的なアプローチでの地域づくり・社会づくりの黒子役に努めている中間支援組織である。

この10数年来、福岡県北九州市の児童館¹における子どもたちの豊かな体験・学びを目的としたNPO・企業等との協働のコーディネーションも担当してきたが、2016年度、同市の児童館5館合同での防災をテーマとしたプログラムの企画支援に携わった。災害支援を専門とするNPOおよび子ども向けの野外体験を専門とするNPOの2団体と児童館5館との協働で、通年がかりで、子ども目線を重要視した防災のユニークなプログラムが展開され、成果報告会



（右写真）も聞き応えあるものとなったが、この場面でふと「我々大人こそ、防災の取組が足りてないのではないか？」という大きな問題意識を抱いた。というのも、日常生活で防災に触れる機会といえば、行政や自治会等の地縁組織が主催する防災訓練が主であり、住民の大多数が内容・広報・時間帯などさまざまな事由から全く参加し得ていないのが実情である。加えて、自主防災組織や消防団も、担い手の高齢化と人材不足が全国共通の課題ともなっている。それなりに大きな事業規模の組織（行政含む）に勤務する者であれば、所属先が主催する年一回の防災訓練などの参加機会はあるが、たいてい避難経路・非常口サインや警報機器の確認が主で、日常生活に活かせる内容でもない。かたや、気候変動もあいまって、全国各地でいつ／どこで／どんな／どれぐらいの災害が起きてもおかしくない様相となっており、動員型の防災プログラムを脱却し、多様な住民を包摂しうるプログラムづくりや環境整備が喫緊の課題ではないかと思い至った。そこで民間の助成金に支援いただく形で、2017年度より「Happy ぼうさいプロジェクト」²として事業化した。主な取組として、全国の複数エリアにおける実証実験（2020年度現在＝札幌市、岐阜市、北九州市、那覇市）・調査研究（先進事例、各種情報）・情報発信に取り組んでいるが、本稿ではこのうち、那覇市での実証実験「防災キャンプ」を取り上げる。

¹ 児童福祉法が根拠法であり、市町村が設置主体となった公共施設。0～18歳を対象に、心身の居場所や豊かな体験機会を提供している。「児童館構成員」なる専門職の職員等が従事。

² 詳細情報へのリンク <http://www.npo-an.com/event/archives/71>



○実施に向けて〔打合せ（関係機関との連携の様子）、参加者への広報、準備等〕

当プロジェクトのアドバイザーの一人として、那覇市若狭公民館の宮城館長に参加いただいており、宮城館長をキーパーソンとしながら、以下のポイントを念頭に進めている。

- ✓ 「防災」「災害支援」に限らない、さまざまな属性の団体とのつながりづくりや連携
- ✓ 地域活動等には疎遠な層の人たち³をとりまく支援機関との連携
- ✓ 無理が生じないような規模感で、楽しめる事業設計

2017年6月より、行政（那覇市役所）の防災担当課・シングルマザーの当事者団体・地域包括支援センター・母子支援施設・日本語学校といった、防災の関係機関や支援機関へのアプローチを進めつつ、2019年1月には、同公民館の新年祝賀行事と抱き合わせて、初の防災キャンプを行った。ともあれ、上記のポイント3つ目の通り、いきなり初回から野外で防災を学ぶための大変なプログラムをすると全体的に無理が生じるかもしれないとのもくろみから、公民館の講堂で1泊、ダンボールで思い思いの寝床を作り、なおかつ非常持出袋を想定したリュックサック1個分の食料・身の回り用アイテムを用意した上で臨むという形で実施した。参加者募集に際しては、公募を行いつつも、公民館が日ごろからつながりのある大学生・キャンパー（テント生活などの野外活動愛好家）・野外調理専門家・防災士などにいわば一本釣りで声かけをする形をとった。



【写真】初の防災キャンプを終えての、ふりかえり会議（2日目・朝）

「防災の学び」を主目的としたプログラムであり、かつ災害時は臨機応変な対応や知恵が求められることから、キャンプ当日は「自己完結」のトレーニングを行うべく、準備し



【写真】最左=那覇市若狭公民館・宮城館長、最右=筆者

た資材はダンボール・新聞・工作用ツール（ガムテープ、はさみ、カッター）のみとし、食事・環境整備などの大部分を参加者の創意工夫に委ねることとした。以降は、メディアや口コミの効果もあり、那覇市の都市公園、津波避難ビル⁴、さらには市外にわたるまでエリアを広げながら展開している。

³ 当プロジェクトではこのような人たちのことを「サイレント層」、具体的には「サイレントマジョリティ」「サイレントマイノリティ」と区分しつつ総称している。

⁴ 地震発生時に津波からの避難が特に困難と想定される地域に建てられる一時的避難施設（公共施設）

防災学習プログラム

防 災 キ ャ ン プ

対象：地域活動等には疎遠な層の人たちをとりまく地域防災の各種ステークホルダー

現状と課題

- 防災を含む地域活動と疎遠な住民層（サイレント層）が増大している。
- 既存の地域防災の取組の参加者層および内容が固定的なままで、訴求力が弱い。
- 災害が多発する中、防災を「自分事」として感じられる楽しい学び・体験の機会がない。

ね ら い

- サイレント層に重きをおいた防災・減災の取組を通じた、自助・共助の強化。
- 地域住民の多様性について、地域防災ステークホルダーが認識や理解を深める。

【目指す状態】○いざという時に災害を乗り切れる自助・共助の力が備わっている。
○多様な属性の機関・団体が強みを持ち寄れるプラットフォームの構築。

連 携 先

- 公民館 ○地縁組織（自治会・町内会等） ○行政（防災、社会教育・生涯学習、教育委員会、市民活動・協働、公園管理などの関係部署）
- キャンパー（野外活動愛好家） ○NPO（まちづくり、バリアフリー、動物愛護、多文化共生、総合型地域スポーツクラブ 等） ○日本語学校
- 児童館 ○社会福祉協議会

実施のポイント（広報、経費など）

- 事業の質を高めるために、公募と並行して一本釣り参加促進を行っている。
- 主催者（ふくおかNPOセンター、若狭公民館）でインターネット上にて事前・事後に発信（ウェブ+SNS）することに加え、第三者のインフルエンサーにレポート（「note」を活用）を書いてもらい、魅力の演出や口コミ促進を図っている。

活動に向けて（工夫点、注意点など）

- 無理なく実施することで、参加者が成功体験を重ねながら規模・内容を充実させている。
- （上記に関連）回を重ねるごとに、チームビルディングができている。
- あえて綿密な計画・体制を用意することなく実施しており、参加者（個人・団体）の臨機応変の対応や主体性が引き出されている。



実施の詳細 令和元年1月～（年間複数回実施中）、活動の様子

開催	学習内容・活動	講師等
2017 年度～	<p>「Happy ぼうさいプロジェクト」（事務局：ふくおかNPOセンター）の実証実験先の一つとして、那覇市若狭公民館と協働しながら、地域防災やサイレント層に関連するステークホルダーとなる機関・団体・キーパーソンへのヒアリングや意見交換会を実施。</p>	<p>特定の講師は招聘していない。</p> <p>対象として、地域防災やサイレント層に関連するステークホルダーとなる機関・団体・キーパーソンを選定。</p> 
2019年 1月	<ul style="list-style-type: none"> ・「防災×やさしい日本語カルタ編」 外国人向けやさしい日本語での防災カルタづくりワークショップ ・「トライアル企画 防災キャンプ」 那覇市若狭公民館講堂での一泊二日キャンプ（公民館の新年祝賀行事の付随プログラムとして） 	<p>特定の講師は招聘していない。</p> <p>コアメンバーとして防災士・稲垣暁氏が参加しており、折々で話題提供や助言を行っている。</p> 
3月	<p>「防災デイキャンプ@緑ヶ丘公園」 那覇市緑ヶ丘公園でのデイキャンプ</p> 	<p>（同上）</p> 

<p>8月</p>	<p>「防災キャンプ 2019 夏」 那覇市津波避難ビルおよび若狭公民館講堂での一泊二日キャンプ</p> 	<p>特定の講師は招聘していない。 コアメンバーとして防災士・稲垣暁氏が参加しており、折々で話題提供や助言を行っている。</p> 
<p>11月</p>	<p>「なは防災キャンプ'19 秋」 那覇市新都心公園での一泊二日キャンプ</p> 	<p>(同上)</p> 
<p>12月</p>	<p>「防災キャンプ in なきじん」 今帰仁村総合運動公園（沖縄本島北部）での一泊二日キャンプ</p> 	<p>(同上)</p>  

<p>2020 年 1 月</p>	<p>「なは防災キャンプ」 20 冬」</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ プラットフォームづくりのための円卓会議 ・ いざという時のための模擬情報共有会議 ・ 防災キャンプ泊二日 <div data-bbox="405 387 852 719"></div> <div data-bbox="405 759 852 1090"></div>	<p>(一社) 九州防災パートナーズ 代表理事 藤澤 健児氏 (当プロジェクト メンバー)</p> <div data-bbox="940 387 1388 719"></div> <div data-bbox="940 759 1388 1090"></div>
<p>2020 年 11 月 ～ 2021 年 3 月</p>	<p>「なは防災キャンプ」 20 冬」 (勉強会)</p> <ol style="list-style-type: none"> ① 若狭地区関係者向け@若狭公民館 ② 曙地区関係者向け@那覇市立曙小学校 ③ 全市の関係者向け@なは市民活動支援センター <div data-bbox="349 1373 796 1704"></div>	<p>NPO 法人にいがた災害ボランティア ネットワーク 理事長 李 仁鉄氏 (当プロジェクト アドバイザー)</p> <div data-bbox="956 1366 1404 1697"></div>

※2020 年春以降はコロナ禍のため、コアメンバーで規模を小さくして的那覇市中心市街地での防災キャンプや、感染症対策を講じた上でのオープンな勉強会を継続実施中。

広報ツール
の一例



「Happy ぼうさいプロジェクト」の詳細のレポート記事へのリンク
(ふくおかNPOセンターの日記ブログ)



○活動を終えて（関係者の振り返り、成果と課題）

成果および課題についての所感は以下の通りである。

なお、当「Happy ぼうさいプロジェクト」およびその一環としての「防災キャンプ」とも継続中である点、含み置き願いたい。

成 果 ○域外からの支援や資源調達が困難な島嶼地域^{とうしょ}での、マルチステークホルダー（多様な属性の関係者）によるプラットフォーム（目的を同じくした共通基盤）形成のきっかけ

○エリアを超えたキーパーソン・団体の発掘

○行政庁内の横断的な連携体制と事業協力

○地縁組織による防災の関心喚起（曙地区）

○若い世代の参画による全体的な活性化（コアメンバーも参加者も）

課 題 ○「防災」の敷居の高さ（例：日本人と接点が少ない在住外国人、多忙なひとり親家庭などまだアプローチが至難な人たち）

○防災の専門家が限られているという島嶼地域^{とうしょ}ならではの事情（防災士が少ない、女性防災士はなおさら）

○行政の積極的参加（だいぶよくなっているものの、異動でリセットされがち）

○企業との連携（観光客も含めての想定となればなおさら異業種のかかわりが肝要）

考察

古賀 桃子（特定非営利活動法人ふくおかNPOセンター 代表）

季節・エリアを問わず、全国各地で災害が多発しており、たちまち生命および衣・食・住に負の影響が与えられかねない状況となっている。ゆえに、とりわけ防災・減災分野における学び・体験活動は、他の領域に比べ「待ったなし」であり、日頃の備えやいざという時の対処といった事後のアクションにいかほど影響を与えうるかの「成果」が大きく問われている。

本稿で取り上げられた事例はいずれも、そうした危機感に裏打ちされたものばかりで、ターゲットの設定を含め創意工夫に満ちたものである。おそらく読み手の皆さんには、防災・減災分野における学び・体験活動は、多彩な工夫を講じてこそということが伝わったことであろう。

防災・減災にかかる学び・体験活動のプログラムの論点は下記のとおりである。これらは、本稿の事例にも共通して見て取れる。

- I. ターゲットの設定
- II. 専門性と演出のバランス
- III. 広報 PR 策
- IV. 空間の有効活用
- V. 事後の効果測定・フォローアップ

以下、それぞれの論点ごとに掘り下げる形で、今後の防災・減災の取組のあり方について提言したい。

I. ターゲットの設定

本稿の事例では、「乳幼児親子」・「高校生」・「防災実践者・関心層」・「外国人」・「キャンパー」など、個別具体のターゲットの設定がなされている。これは防災・減災の取組に限らない重要なポイントでもあるが、「〇〇地区住民」・「高齢者」・「子ども」といったざっくりとした設定をしてしまうと、後段で扱う広報 PR 策も含め、当事者には響かず、結果的に動員型の実効性の低いプログラムとなってしまうがちである。多くの人に知ってほしいという熱意は重々理解するが、だからこそ、個別具体のターゲットを設定し、それぞれの暮らしぶりを想定しながら、企画内容を組み立てることが肝要である。多忙で時間的・経済的余裕を持ちづらい層の人たちが増大している時勢も踏まえると、なおさらそうした姿勢が問われよう。



Ⅱ. 専門性と演出のバランス

ここでいう「専門性」とは、防災・減災のために必要な知識（想定される災害の種類、ハザードマップの情報、避難時に必要な生活用品、発災時に物資配給を受ける方法、避難所生活で心がけておきたいこと、安否確認の手段 等）のことであり、従来の防災関連プログラムでも扱われてきたことである。最近は防災士資格者が講師となって指導する機会も増えてきたが、「防災となると小難しい印象を与えがち」「参加者はいつも同じ面々ばかり」といった嘆きもしばしば耳にする。かたや、本稿の事例のように、ターゲットの自主的な参加を得られている取組ほど、調理・フィールドワーク・軽運動などの楽しい体験を織り交ぜたり、近隣にあるおしゃれな空間を活用したりするなど、随所に細やかな演出が凝らされている。とりわけ防災・減災に関しては、学び・体験が腑に落ちて実践（災害時のための備え）につながるということが必須であるため、心のハードルが低くなるような演出の努力が不可欠であろう。

Ⅲ. 広報 PR 策

「Ⅰ. ターゲットの設定」とも不可分であるのが広報 PR 策である。例えば岡山市子どもセンターの取組では、子育て中のママたちが頻繁に利用する LINE やママ同士の口コミが奏功している。公共施設の配架棚におけるチラシ設置・自治体が発行する広報紙・回覧板といった策がこれまでの常套手段であったが、勤労世代以下はこうしたものを目にするのが少ない、または皆無な人たちが大半である。伝えたい相手方のライフスタイルをつぶさに想定した上で、情報の効果的な流通を図る必要がある。

Ⅳ. 空間の有効活用

本稿の事例では、公民館等の公共施設での取組もあれば、都市公園を活用した例もある。公共施設は認知度や利便性が優れているが、ターゲットによっては、同じく認知度・利便性が優れている民有スペースも探ってみて損はないはずである。巷のイベントを見ている、よく知られた飲食店・カフェやシェアスペース、商業施設の広場などでのイベントが増えてきた感がある。ターゲットによっては魅力的なプログラムを行う助けになるという点、空間の有効活用策は、上記3つの論点とも不可分である。

Ⅴ. 事後の効果測定・フォローアップ

冒頭でも述べたとおり、生命および衣・食・住への影響に関わる学び・体験活動を行う以上、「やりっぱなし」ではなく、事後の効果測定やフォローアップも見込んでおきたい。例えば、毎回宿題（例：100円ショップで非常持出袋を作ってみよう！）を出し、次の回で各人が報告し、そこで新たなノウハウや気づきを共有するという「学び合い」を前提としたプログラムもみられるようになってきた。事後のアクションにいかに関与を与え得るかという点は企画段階から念頭に据えてこそであろう。



まとめ

「社会教育の視点をもった防災教育 実践事例集 防災を通した人づくり・地域づくり」の作成にあたって、3つの実践について関係者に取材し、その取組の詳細をまとめた。長きにわたり地域の防災に取り組んでいる方からみれば、特段変わった点がないと思われるかもしれない。しかし、今年度は、新型コロナウイルス感染拡大の影響により先の見えない状況の中で、様々な制約を受け、計画の修正を余儀なくされた。そのような状況にもかかわらず、特定非営利活動法人ふくおかNPOセンター古賀桃子さんから御提供いただいた事例も含め、4つの事例は防災に限らず地域の課題解決に向けて意欲的に活動している方々の熱意と行動によって実際に取り組まれた実践だ。

実践事例①「高校生と一緒に考えよう 私たちのまちの防災」は、自分たちの地域の防災・減災について地元の高校と協働で取り組まれている。他の主体、特に学校と協働で取り組もうと考えている方の参考になるのではないだろうか。学校の取組を生かし、地域の中に防災・減災について学び合う講座を作ることが、地域住民の防災に対する機運を高めることにつながった事例である。

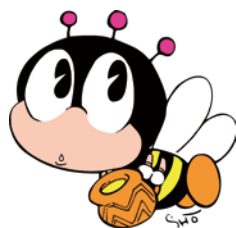
実践事例②「防災語ろう会」は、地域住民を始め、自主防災組織の関係者や町内会長等を上手に巻き込んで、月に1回のペースで地域に防災について学ぶ場を作り上げた公民館の取組である。「できることから始めること」、「継続的に学ぶ機会を設けること」が重要であることが示された事例である。また、公民館の防災・減災の取組として参考になる点も多いのではないだろうか。

実践事例③「おやこde防災 ～私に合った防災手段を見つけよう！～」は、災害発生時に困難な状況に陥りやすい乳幼児親子を対象に、おやこクラブで取り組まれている。乳幼児親子を対象にした学習プログラムとしてはもちろん、体験や話し合い活動等を通して防災・減災について学ぶことが参加者の自助の意識を向上させる上で効果的であるという示唆に富んでいる。

実践事例④「さまざまな人を包摂する楽しい防災の試み～Happyぼうさいプロジェクト～」は、古賀桃子さんから御提供いただいた事例である。楽しい学び・体験の機会を通して防災・減災を「自分事」として感じられる防災キャンプの取組で、無理が生じないような規模感で、楽しめる事業設計により継続的に取り組まれている。地域活動と疎遠な住民層に重点をおいた防災の取組であると同時に、地域防災のステークホルダーが地域住民の多様性について認識や理解を深めることをねらいとしている点に注目してもらいたい。

どの事例も参加者の学びを通して自助の意識の向上を促し、自らの命を自ら守ることができるように支援したり、参加者同士のつながりを通して地域に防災・減災のネットワークを形成したりすることにより、災害に強い地域づくりの推進につながったものである。

これから地域の防災・減災に携わる関係者が、取組を計画したり、見直したりする際に、この「社会教育の視点をもった防災教育 実践事例集 防災を通した人づくり・地域づくり」を参考にいただければ幸いである。そして、防災力の向上に向けた取組が各地域で実践され、災害に強い地域づくりが推進されることを願っている。



発行 岡山県生涯学習センター

〒700-0016 岡山市北区伊島町三丁目1番1号

TEL : 086-251-9751 (振興課)

<https://www.pal.pref.okayama.jp/>

<https://www.facebook.com/okasyogaise/>

